

第23回 ちゅうでん教育振興助成（2023年度）

小・中学校の部 報告書資料

| | |
|-----------|---------------------------|
| 学校名・団体名 | 長野県飯田養護学校 |
| コース | 学校支援コース |
| 活動・研究のテーマ | 刺激を受け取りやすい教室環境整備と刺激の受容と表出 |

〈活動・研究の意義および活動報告〉

1, 活動に至る経緯

本校の重度重複グループには、知的障がいや肢体不自由等の障がいを2つ以上併せ有し、日常生活のすべての場面において介助が必要とされる重度重複障がいの児童生徒が通っている。知的発達的面においても、自他との意思疎通及び環境への順応が著しく困難ともいわれている。また、「障がいがこれまで以上に重度化している」という現状も見られ、認知面の発達にも差がある児童生徒が一緒に教室で過ごしているという状況が続いていた。また、障がいが重度であることから表出が見取りにくい児童生徒もいる。何かしらの表出はしているが動きが微細であることで、かかわる教師は受け取ったり、見立てたりすることが困難である。このような様々な困難さを有している児童生徒のよりよい発達を促すため、昨年度より実態別の教室配置での学習を実施している。静かな環境で一つの刺激（光や音など）だけを提示した際には体の動きを止めたり、光源や音源に目を向けたりする姿が見られることもあるが、複数の刺激が同時に提示されるような日常生活の状況の中ではこのような姿がほとんど見られないことがわかってきた。

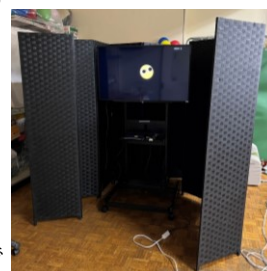
2, 活動・研究の目的（ねらい）

学習を進めることに困難さがある児童生徒に対し、児童生徒の実態に合った整えられた学習環境（複数の刺激が同時に提示されることのない統制された空間）の中で刺激（光や音、ものなど）を提示していくことで、より認知面での発達を促すことができるのではないかと考えた。また、障がいが重度であることから表出が見取りにくい児童生徒に対して脈拍等の数値から客観的な情報を得ることができれば学習を進めるうえでのヒントとなるのではないかと考えた。また、活動・研究にあたり、重度重複障がい児生の指導に精通している外部講師にご指導いただいた。

3, 活動内容

①刺激そのものに注意を向けられるように、学習環境を整える。

A生は、教師が提示した刺激には反応するものの、すぐに違う方に気が向いてしまう生徒である。姿勢が崩れることで刺激への反応も変わってくるため、スネーククッションで姿勢を整えたうえでパーティション等で刺激の統制を行い、学習を進めた。スネーククッションで支えながら側臥位になり吊り遊具を提示し、遊具の後ろにパーティションを設置した。また、教室を暗転させ、テレビの裏にパーティションを立てたり、対象物にブラックライトの光を当てたりしてより光源に注目できるようにした。



②光、振動、匂いなど五感をフルに活動する学習を仕組み、児童生徒の動きや反応を引き出す。

B児は刺激に対する反応が見取りにくく、どの刺激に対して反応を示しているのかもわかりづらい児童である。また、布団に横になった姿勢（仰臥位や側臥位）でいることが多く、体を起こした姿勢（座位など）でいるときには比較的覚醒度が高い。以上のことからより刺激が統制された教室においてクッションチェアで姿勢を整え、振動クッションによる振動やネックスピーカーを使用しての音楽刺激などの刺激を一つずつ提示する学習を行った。また、生活する教室と学習する教室の違いが分かるように学習する教室だけにアロマで香りをつけた。その様子を iOAK というアプリで撮影し、記録した。



③動きが微細で反応が見取りにくい児童生徒を対象に、機器をつけて脈拍などの数値を計測し、刺激提示と数値の関係性を探る。

B児は刺激に対する反応だけでなく、日常的に覚醒しているのかがわかりづらい児童である。どのような時に覚醒しているのか数値で確認することを目的に、5月頃よりサチュレーションモニターを装着し、数値と体の動きなどを用紙に記録した。ただ、モニターは移動や学習活動で扱いづらいことがあったため、アップルウォッチを使用することとした。その場で直接数値を見ながら活動をしたり、iOAKで記録したデータと脈拍のデータを合わせて確認したりすることで、数値と覚醒具合や刺激提示との関係性などを探った。

④教室環境や学習の様子を外部講師よりご指導いただく。

個別学習や単元学習、教室環境の様子を実際に見ていただき、アドバイス及び講演をいただいた。

4. 子どもたちへの効果（成果・課題）

①吊り遊具をそのまま提示した際には、一瞬遊具を見た後すぐに別の方向に視線を向けてしまっていたが、遊具の後ろにパーティションを立てると遊具に注目する時間が伸びた。また、暗転した教室でテレビの後ろにパーティションを設置し映像を流すと、映像を見る時間が伸び、身体を前後に揺らす動きが減った。以上のことから、A生にとって視覚的情報を得るためには、与えたい情報以外のノイズとなる刺激をパーティション等で統制する必要がある、統制された環境の中ではより情報に注目しやすいということがわかった。

②これまでの観察の中で黒目が良く動いていることがあったため、その動きを表出ととらえていたが、今回の観察で刺激を提示したときには比較的口元がよく動くということがわかってきた。黒目については刺激のあるなしに関わらず動いていることが多かった。刺激は受け取っているようだが、刺激の種類によって表出に違いが出ることはなかった。刺激の種類による表出の変化は見られなかったが、刺激のあるなしによる表出の変化は見られたことから、今後も整えられた教室で刺激を提示していくことで表出を引き出していくことができると考える。

③心拍の数値を測ることでおおよその目安（脈拍が95以上あるときは覚醒しているようだ）を得ることができた。また、5月からの記録で13時以降の時間帯では比較的覚醒している可能性が高いということがわかった。刺激提示に対して脈拍が大きく変化することはなかったが、脈拍が95以上あるときには体の動き（腕の動きや口の動きなど）が比較的多くみられた。体の動きと脈拍の変化は関連しており、95を下回ると動きも見られなくなるため、より覚醒している時間帯でどのような学習をしていくかが課題となってくる。

④外部講師のアドバイスを受けて、学習活動における刺激提示の方法を変更した。C児の人の動きを追う姿から活動に向かうまでの準備の様子も見せることで、人の動きから活動の流れがわかり、表出につながるのではないかと考えた。実践回数が少なく、表出の変化までとらえることはできなかったが、日常生活の中でも人の動きに注目できるような動線を意識して支援を行っている。頭元で人が動くことで顔を上に向け、動いている様子を見ている姿が多くみられるようになってきている。

| 時刻 | 心拍数 | 時刻 |
|-----|-------------|----|
| 107 | 12月6日 13:31 | |
| 108 | 12月6日 13:25 | |
| 107 | 12月6日 13:22 | |
| 106 | 12月6日 13:18 | |
| 109 | 12月6日 13:13 | |
| 111 | 12月6日 13:10 | |
| 111 | 12月6日 13:02 | |
| 119 | 12月6日 12:55 | |